

龍溪寛のたゞの道

1. 日本から行った百戸前、中国西南の省雲南
 2. 一人の日本人傳が行方不明にたりたり。
 東洋願者系龍溪寛という人物あり。彼は
 ありありと正しく仙臺を日本に特来することを
 急し、千（ハット）に伺いし。最終目的地は
 ラチコチ。しかし、当時の千（ハット）は外国人
 の一切の入国を認めずせんが故に。そこで彼
 は考案し、数度の試行をくりし。遂に龍溪
 江上流の消息を断ちたり。彼の身にたゞの起
 こりたか、お尋ね士中たりのか、そのことも事故と
 見えたり。現代の僧院に身を隠し、たゞの
 才に明確ありたりせん。彼の調査は、いつかあ
 りたりにたり、事実をたゞ述べてゆくよう
 にたりたり。彼の人間性、格のたゞたりの
 か、早稲田の隠蔽工にたゞたりのか、当時の雲
 南をめぐり、英、仙の社会事情、起因あり
 たり。たゞのたゞ、二枚りの高才者、入りのたゞ、改め
 たり。たゞのたゞ、二枚りの高才者、入りのたゞ、改め
 たり。

金子民雄

数奇の人

いまからざっと百年ほど昔の一九〇一年、一人の日本人僧侶が中国西南の省、雲南から揚子江（長江）上流の金沙江に沿って北上したまま、消息を断ってしまった。この人物は東本願寺派の能海寛と云った。彼がチベットを目ざしたのは、別に探検や地理学的調査を目的にしたのではなく、あくまで正しい仏典を将来することだった。

インドでは十世紀を境に仏教は衰微し、仏教の原点であるサンスクリット語のテキストも失われていった。しかし、この最良の原典訳が「カンジュル」、「タンジュル」（西藏大蔵經）であると分るにつれ、明治に入るとにわかはこの經典を求めようという声が、次第に大きくなった。なにしろ日本では全てが漢訳の仏典を元にしていたからである。

ただチベットに入ることは、考えるほど簡単ではない。ではなぜそんな気を起したのか、それにチベットへ潜入し

ようとする前に、なぜ東京に出て来て慶應義塾に籍を置いたのか、そこで彼は何を学んだのか、これを乏しい資料から見ていってみたい。

能海寛は、明治元（一八六八）年、島根県の山里にある真宗大谷派の淨蓮寺で生まれた。しかし、七歳のとき父を亡くし、大変苦勞することになった。明治十九年三月に京都に出て、西本願寺の普通教校に入ったものの実家から十分な学資が続かず、一層苦しんだ。ただ明治二十二年九月に壇家の好意で学資金二七〇円を四年分として出してもらい、一応勉学の見通しが立った。

普通ならこれで一安心で、以後、故郷に帰って住職を継げばよかった。ところがたまたま前年の明治二十一年、学友の東温讓が仏典を求めてチベット入りを目的にインドに出かけるのを見送ることがあり、このときから能海にも鬱勃たるチベット行の気持が、押えられなくなったらしい。しかし、現状の学力ではとても国外に出られる実力がない。

幸い、いま彼の手には奨学金があった。夢の実現はすぐ目の前にあるではないか。あとは自分の決意一つにかかっている。お金を手にした四カ月後の明治二十二年十二月、彼は突如、東京に出る決意を固めた。この発想は十二月十二日の午前十一時頃、教室で授業を受けているとき、突然頭にひらめいたという。いささか神懸りの話としては面白いが、これを実行しようとなると、もう常軌を逸していると思えなくなってくる。

彼は「春秋日記」の中で、こう書いている。なんと例の靈感を受けた翌十三日には、もう「朝星ヲ頂テ京都七條停車場ニ行キ、五時卅五分発ノ一番列車ニ乗込ミ東都ヲ指シテ出」発したというのだ。これでは着のみ着のままの状態だったにちがいない。まあ無謀といえよそれまでだが、東海道線がこの年に開通したばかりだったのである。

慶應義塾入学

能海はその短い生涯の中で、まさに書き魔と言つてよいくらいの日記、メモなど調査記録を書き遺した。明治二十三年の丸一年間は、慶應義塾での学生生活を送つた年であったが、惜しいことに彼の日記である「春秋日記」は、

わずか一、二月の二カ月分しか遺っていない。他は現在見つかつていない。ただこの間をわずかに補うものに「英文日記」がある。能海が慶應義塾に入ったのも、英語の力をつけたかったからで、一月二十九日の項にこうある。「英文ヲ以テ主義トスベシ…… Wisdom and Mercy. No. 1st」ヲ作り、英文ヲ作り、主義ヲ述ベントス」と記して、「英文日記」の第一号を書き始めた。これは慶應に進んだ一番大きな成果だったであろう。

東京に出て来た能海はいよいよ慶應の入学を決意したようである。一月十三日に双書（願書）と履歴書を提出した。入学するには試験があったようである。具体的になんか風に行われたのか不明だが、学務課からは試験日は追つて通知すると言われたようである。一人で受けるのか、幾人が集つたところであるのか記載がない。三日たった一月十六日になつてようやく、十八日に試験を行うので出校するようにとの通知がどいた。この日は午前七時五十五分から試験を受けたが、どんな試験だったか分らない。どうも結果がよくなかったようである。重い気持で宿に戻つたらしい。しかし、試験はパスし、予科三番一に入学許可は出たものの、これは希望していたものでなかったようである。午後一時また

学校に出かけ、再受験を願ひ出たものの、これは聞き入れてもらえなかったようだ。彼はようやく目的の学校に入學できたものの、前途を考えると暗かったらしい。學費がとも続きそうでないのだ。學費が安く、學期も短い井上円了の創設した哲学館(現・東洋大学)に行こうかどうか、悶々として夜もよく眠れなかったらしい。しかし、「ヤハリ福ノ大学ヲ卒業スベシ」、予科に入るか正科に進むか、それはそれ「福ノ大学」が一番との結論に達したものでらしい。

二月に入ると学校の授業も本格化して、能海にとっても英語による授業が魅力的だったようだ。よく理解できないところもあつたらしいが、教師の大半が外国人たちだった。こんな折、面白いことがあつたらしい。二月五日の夕刻六時から、三田美似教会で女性も加えて廃娼論の演舌会があるという噂が立ち、興奮した学生たちが大挙して押しかけ、能海も弥次馬になってこれに参加したらしい。ただ肝心の教会の扉は固く閉じられてしまい、中に入れなかったものの学生たちの罵声やら叫び声で、相当な騒動だったようだ。学生たちが賛成だったか反対だったか、記載がない。しかし、明治二十年代の初め、すでに女性解放の先駆者たちが慶應周辺で議論していたとは、この日記で初めて

ちの一人に、サー・エドウィン・アーノルドがいる。二月十九日の日記に、「(午後)三(時)、サー・エドウィン・アーノルド、令女ト共ニ福沢先生等数名來塾」とある。この折、アーノルドは化学の話を長々としたらしいが、この間、一緒に来た令嬢はおとなしく椅子に坐つて話を聞いていたという。アーノルドはインドにいた間、梵語学校の校長を勤め、その後、英国に帰ってデイリー・テレグラフ紙の主筆となり、能海が東京に出て来る年の十一月に、特派員として来日したのだという。彼は仏教に深い関心を抱き、釈迦の生涯をとくに無韻詩に詠んだ「アジアの曙光」(The Light of Asia, 1879)の著者として著名だった。能海たちが翻訳を試みたという「亜細亜の宝珠」というのは、この詩集だったろう。

能海の英文日記には、彼と令嬢の印象が細かくふれられている。能海はこの学校での出会いのあと、アーノルドの自宅をも訪問し、アーノルドとは日本の仏教について、令嬢とは季節の花について語り合ったという。とくに能海の仏教についての問に対し、アーノルドの見解は日本の仏教はシナ、朝鮮を経由して入つて来たので、インド起源のものとは違っていると指摘したらしい。本来は同じはずのもの

知った。福沢諭吉は明治七年当時から、日本で最も早く演説会というものを普及し始めていた。

運命を変えた人との出会い

能海が一種衝動的に東京に出て来て、関西で得られなかった大きな感動と強い印象を受けたのは、一つは自然景觀といま一つは人との出会いだったろう。このうち自然とは実は富士山であった。彼は名だけは聞いていたものの実際の富士山を見たことがなかった。これが明治二十二年の年末、東海道線の車窓から初めてこの霊峰を仰ぎ見て、大変な感激を受けたものらしい。東京に出てからこの山は到る所から姿をのぞかせたので、ますます感銘は大きかったようだ。三田の慶應義塾の校舎の背後から望んだ印象は、日記にも書き遺しているし、英文日記の方には富士のカットが自筆で描かれている。

慶應での在学はわずか一年足らずの短い期間だったが、人との出会いは大きかったにちがいない。とくに慶應創設者の福沢翁もその一人だったはずだが、当時彼はすでに雲の上の人だったので、気軽に話せる相手ではない。しかし外国人との関わりの方がむしろ楽しかったらしい。そのう

のが違うとなると、僧侶としての能海には少なからぬショックだったようである。この部分の能海の「英文日記」にいくらか混乱があつて、よく意味がとれないが、令嬢は大変美しい容姿をしていたと言っている。(Sir Edwin Arnold:.....came to Japan which is daughter who is look 2 time eight years old and very beautiful.....)。令嬢が八歳というのではまだあけない子供で、多分、この場合 8 x 2 の sixteen のことだったのであろう。

ウェストンとはだれだったのか

能海が慶應義塾で会った外国人教師の中で、とりわけ注目されるのが、二月二十四日にある「今日ハ Weston 云フ英人ニシテ種々話タリキ」英国籍」という記事である。そして、さらに二十八日の項に、「(ウェストン新聞ヲモチ来リ、追々ニハ日本デモ英字新聞ハ盛ニナル)ナレバ読ミタルベシトテ、良文ナリトテ英国ノダービシア県ノ新聞ヲ持チ来リ、ヨマヤシヤフノ(Pr)語々ハナス(英文)」と、記している。このウェストンという人物像がいまひとつはつきりしないのである。のちの日本人にとって、とりわけ興味を引くのは、このウェストンという英国人がウォ

ルター・ウェストンではないかという疑問である。

日本でウェストンといえば、『日本アルプスの登山と探検』（一八九六年、ロンドン刊）の著者ということになる。では慶應にいたウェストンと同一人物だったかとなると、途端に不明となってしまう。証明する手が無い。ウォルター・ウェストンは英国教会伝道協会（CMS）の宣教師として、明治二十一（一八八八）年来日し、熊本・神戸等で布教活動をしたあと、明治二十三年一月二十四日、神戸から横浜に出て来たとき、これは日本山岳会編の「ウェストン年譜」にある。そして、どうやらこの一月にCMSを辞めたいらしい。するといつでも東京に出て来られた条件が揃っている。

私はウェストンがどれであつても一向にかまわないのであるが、昨年は日本山岳会創立百年に当ることだし、能海（邦文）日記も覆刻されたこともあつて、いまま少しこの関係をじっくりさせたい気持ちもある。ただ能海とウェストンの関係を初めて発掘したのは岡崎秀紀氏であるが、決定的な資料がいまだに見つかっていない。慶應の方にも当時の記録がないとなると、あとは推測するしか手がない。

そこで一番可能性のあるのは、ウェストンが授業中に持度、富士山に登ってみてはどうか。富士山は三八〇メートルあるから、もし大丈夫なら高山病にはならないだろう。しかし、そう言ったウェストン自身がまだ富士山に登っていなかったのだから、自ら挑戦してみたのではなかったか。ただこれを証明する裏付け資料がない。

ウェストンは明治二十七（一八九四）年に帰国し、再来日したのは、三十五年のことだった。このとき能海は東チベットの向つたまま消息を絶つていた。このニュースをウェストンは知つたろうか。多分、聞いてはいなかったろう。明確な証拠を欠くが、私は能海が慶應で学んだウェストンはほぼ登山家のウェストンと言つて間違いないと思う。相矛盾するものがあるにすぎない。二人は偶然に出会い、また互いに影響を与え合つてやがて別れていった。当時のウェストンは無名であつた。その後、彼は日本で不滅の名を遺した。個性の強い二人を引き合わせたのは、同じ個性の強い福沢の学校だったということも、なにか意味があつたのかもしれない。

消えた足跡

明治二十三年十二月、能海は慶應義塾を退学し、翌年一

参の英字新聞を生徒に見せたという。その英文日記の一節にある Darvshire Advertiser And Journal etc. の新聞名の Darvshire である。能海は *his town* としていたので、これを信ずればここがウェストンの生地ということになる。ただし Darvshire は正しくは Darbyshire のはずである。ダービシャー県の中心都市がウェストンの生まれた Darby に当り、中村保氏が英国山岳会の友人に問い合わせた下さつた限り、これは確認できた。すると慶應にいたウェストンと登山家のウェストンとは、同じ土地が生地ということになる。

資料の面から推定がむずかしいのなら、こんな方法はどうだろう。能海が慶應に在学中の八月、ウェストンは富士山に登り、この頃から積極的に登山に熱中していく。そして翌年八月になると、今度は能海が富士山に登る。これは偶然の一致だったろうか。能海はウェストンに、自分は将来、チベットに行きたいと言つたことはなかったらうか。もしそうなら、ウェストンはなんと言つただろうか。ただ開き流したか、あるいはこんなことは言わなかったらうか。——チベットは平均高度が四〇〇〇メートルを越えている。君はこの高度に耐えられるだろうか。それには一月に哲学館に入学することになった。理由は学費の問題だったろう。二十六年七月に哲学館を修了して、故郷の島根に帰ると、本山（東本願寺）にチベット行の支援を要請し、ようやく旅行費用の援助が受けられることになった。

明治三十一（一八九八）年七月、神戸港から上海に渡り、次いで揚子江を遡江して三峡の難を抜け、翌三十二年一月に重慶に着いた。ここからチベット国境の町バタン（巴塘）にまで行つたものの、現地民の妨害で入蔵は果せず、結局、四川省成都に引き返すしかなかった。そこで明治三十三年、北方ルートに切り替え、西寧、青海よりラサクを狙つたが、これも失敗し、重慶に戻るしかなかった。翌年、今度は雲南経由でチベットに向うが、四月に故郷に手紙を出したのを最後に、以後音信不明になつてしまった。彼の運命にながらつたのか、原因はいまだ不明である。それから茫洋一世紀がたつてしまった。

（歴史家 かねこ たみお）

〔付記〕

「春秋日記」は「能海著作集」第三巻（うしお書店）に収録されている。「英文日記」は同十三巻に収録予定。